

# わが国における言語学の成立

## 関連参考事項表

櫻井 美智子

西暦（年号）	関連事項	参考事項
710(和銅3) 712(和銅5)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・平城京（奈良）に遷都。</li> <li>・『古事記』3巻。古代伝誦の諸伝を天武天皇が撰定し，稗田阿礼に誦習させ太安万侶が記録した現存する日本最古の歴史書。伝誦性の強い語などは万葉仮名を用い，序文は純漢文。</li> </ul>
720(養老4)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・『日本書記』正格の漢文で書き，歌謡・訓注語彙に漢音を基とした万葉仮名を用い，清濁の書分けがある。</li> </ul>
755(天平7) (勝宝)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・『万葉集』20巻。最終歌は759（天平宝字3）年。先行歌集の集大成と思われる巻毎に用字上の相違がある。</li> </ul>
794(延暦13)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・平安京に遷都。</li> </ul>
858(天安2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円仁『在唐記』円仁が在唐中勉強したことの詳細事項の記録。悉曇学が国語音と対比して説明してある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円珍 入唐帰国。多数の梵文・経文を持ちかえる。</li> </ul>
880(元慶4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安然『悉曇藏』8巻。当時の諸文献をつぶさに検討した上論考したもの。音韻觀察に詳しい。</li> </ul>	

887(仁和3)			。藤原基経関白となる。(関白のはじめ)
892(寛平4)	昌住『新撰字鏡』	漢和辞書。	
900(昌泰3)			
934(承平4)	源順 <sup>シタゴエ</sup> 『和名抄』(『倭名類聚鈔』)	漢語を出して和訓を万葉仮名で注した規範的な漢和辞書。	
1086(応徳3)			
1101(康和3)	明覚『悉曇要訣』	4巻。梵語の諸訳対照・悉曇学・字相字義などについての学殖を問答体で記したもの。平安時代中期の悉曇学書中最も高度なものといわれる。五十音図及びそれについての記事がある。	
1164(長寛2)	橘忠兼『色葉字類抄』	2巻。伊呂波順による訓または音によって漢字を検索する辞書の現存最古のもの。この頃成る。	
1166(仁安1)	兼朝『悉曇反音略积』		
1167(仁安2)			
1192(建久3)			
1220(承久2)	慈円『愚管抄』	漢文・漢字に対して国語の尊重すべきことを説く。	
1221(承久3)			
1271(文永8)			
1295(永仁3)			
1281(弘安4)	『塵袋』	11巻。著者不明。書物の起源620条を問答体で記した類書。語源辞書の趣あり、文献に依拠した学問的なもの。	
1333(元弘3)			
1376(天授2)	中国人陶宗儀『書史会要』	いろは歌を挙げ 漢字で発音を注	
			。鎌倉幕府滅ぶ。
			。承久の乱。
			。イタリヤ人 Marco Polo の東方旅行。
			。平清盛太政大臣となる。
			。源頼朝征夷大將軍となり鎌倉に幕府を開く。

1444(文安1)	す。ハ行子音のfからhに変化する傾向が推知される。 。東麓破納『下学集』2巻。国語辞書。室町時代の意義に従って天地・時節門から数量・言辭・疊字門に至る18門に分類し、用字・語源を記した辞書。	
1467(応仁1)		。応仁の乱（戦国時代のはじまり）
1477(文明9)		。Marco Polo『東方見聞録』刊。
1474(文明6)		
1484(文明16)	。『節用集』国語辞書。成立は1469～87の頃。室町時代の普通語の語彙の用字を正し、語釈を施し、語源を説明したもの。 。大伴広公『温故知新書』3冊。純然たる国語辞書としては最古の五十音引き項目別のもの。各部の見出しは梵字。約12,000語収録。	
1492(明応1)	。朝鮮人による『以路波』イロハ47字の諺文音訳。ハ行音はf。	。Columbus アメリカ発見。
1498(明応7)		。Vasco da Gama アフリカの南端喜望峰を経て印度に入る。
1501(文亀1)	。申叔舟（朝鮮人）「語音翻訳」『海東諸国記』の付録として出た。琉球語を記録。	
1532(天文1)	。『おもろさうし』第1巻。1623まで23巻に琉球古歌謡を収録。	。ポルトガル船暴風のため豊後神宮寺浦（今の大分市の沖合）に漂着。島津家・大友家で通商を約す——欧人来日の初め
1541又は42 (天文10又は11)		。ポルトガル人 Francisco Jeimoto, Antonio da Motta, Antonius Peixota（又は Fernão Mondez Pinto）の3名が大隅国種子島西之村浦に漂着。鉄砲と火薬を伝える。
1543(天文12)		

1549(天文18)	<p>。中国人による『華夷訳語』の「日本館訳語」がこの年校正される。日本語566語を収める。</p>	<p>。ポルトガルのキリスト教宣教師イスパニア人 Francisco de Xavier が伴天連 Cosme de Torres 伊留満 João Fernandes と支那商船で布教のため渡来——キリスト教渡来の最初（ザヴィエルは1551年印度にかえるまで2年4ヶ月滞在）</p>
1563(永祿6)	<p>。肥後川尻で病死した伊留満 Duarte da Silva に次の稿本があった。</p> <p>『日葡辞典』（<i>Vocabulario da Lingoa de Iapam</i>）  『日本文典』（<i>Arte da Lingua Iaponeza</i>）  歐洲人による日本語の文典・辞書の最初のもの。</p> <p>。伊留満 João Fernandez は伴天連 Luis Frois の助力をえて肥前度島でラテン語式の『日本文法書』を作り、巻末にアルファベット順に配列したポルトガル語と日本語の対訳辞書をそえた。</p> <p>。鄭舜功（中国人）『日本一鑑』日本語約3400語を収める。</p>	<p>。イスパニアの隆盛</p>
1564(永祿7)		
1566(永祿9)		<p>。室町幕府滅ぶ。</p>
1573(天正1)		<p>。織田信長安土城に入る。</p>
1576(天正4)		<p>。切支丹三諸侯大友・大村・有馬の三人はイスパニアの Philippe II とローマ教皇 Gregorius XIII に少年使節を派遣。</p>
1582(天正10)		<p>。羽柴秀吉関白となる。（翌年太政大臣）</p>
1590(天正18)		<p>。秀吉キリスト教禁止令を出し、宣教師の日本退去を命ず。</p>
1585(天正13)		<p>。西洋式活版術輸入。</p>
1587(天正15)		

1590(天正18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。秀吉全国統一。徳川家康江戸城に入る。</li> <li>。伴天連 Alessandras Valignano は九州三諸侯の少年使節団帰着とともに印度副王の使節として入国し、西洋の印刷機一台、日本文字凸形に鑲刻できる工人数名を伴う——翌年から出版されることとなる『吉利支丹版』の書物の印刷に供す。</li> <li>。若狭の Yofuquen (養甫軒) Paulo とその子 Vicente との共編『サントスの御作業』2巻1冊。肥前加津佐学林刊。</li> <li>Santos (葡) は聖人の意。聖人伝でローマ字つづりの文語体で書かれている。前年持帰った印刷機で出版。現存するキリシタン版最古のもの。引続きキリシタン版が発行される。</li> <li>。秀吉伏見城(桃山)に移る。</li> </ul>
1591(天正19)	
1593(文禄2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。『イソポのフワブラス』(<i>Esopo no Fabulas</i>) 3巻1冊。天草学林刊。わが国における西洋文学最初の訳書。ギリシャ語からラテン語訳したものもの重訳。ローマ字で綴られた。日本語口語訳。桃山時代の口語研究資料でもある。</li> <li>。『羅句語 日本語 対訳文典』(<i>De Institutione Grammatica</i>) 1冊。天草学林刊。Emanuelis Alvarez 編『語学階梯』3巻を底本にした日本人のラテン語学習のためのもの。ラテン・日本語・ポルトガル三ヶ国語の動詞の変化を列挙対照して説明。文典の最初の出版。</li> <li>。『羅葡日対訳辞書』(<i>Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum</i>) 1冊。908頁 天草学林刊。Ambrosius Calepinus</li> </ul>
1594(文禄3)	
1595(文禄4)	

1598(慶長3)	の辞書に拠った。1870(明治3)にローマで <i>Lexicon Latino-Japonicum</i> として復刻。	たと伝えられる——ヨーロッパ人日本渡来(1541又は42)より50余年後。
1600(慶長5)	。『落葉集』( <i>Racuyoru</i> )刊。耶蘇会士が日本語の漢字のよみ方の字形を知るための字書。	。関ヶ原合戦で東軍大捷。 。イギリス人 William Adams (のちの三浦按針) がオランダ人 Jan Joosten van Lodensteijn とオランダ船 <i>Erasmus</i> (のちの <i>Liefde</i> 号) で豊後臼杵海岸に漂着。のち家康の外事顧問となる。 。イギリス人東印度会社起す。(オランダ人は1602年東印度会社を起す) 。徳川家康征夷大將軍となり, 江戸幕府開く。 。朝鮮より活字を持帰りこの頃から經典等活字印刷される。 。イギリス James I 即位 (Stuart 朝のはじまり) 。江戸幕府 内外貿易船に朱印状を下附することとする。
1603(慶長8)	。ポルトガル耶蘇会司祭 João Rodriguez (1586来日, 1591追放さる) と Emanuel Barreto らの編『日本葡萄牙対訳辞書』(又は『日葡辞書』 <i>Vocabulario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues</i> ) 長崎学林刊。語数32800, 810頁。ローマ字綴り活字版。スペイン語訳1630マニラ刊。仏語訳1862~68パリ刊。このマニラ版が欧州・南北中米・フィリピンなどで普及。	
1604(慶長9)	。João Rodoriguez 編『日本大文典』( <i>Arte da Lingoa de Iapam</i> ) 3巻。長崎学林刊。1594天草学林刊のラテン語文典を適用して日本語口語を分析。後世のテニヲハを post-position という術語でこの書が初めて使う。	
1606(慶長11)	。John Saris『セーリス航海日記』( <i>The Voyage of Captain John Saris to Japan</i> ) 日本語々集の紹介がある。	。イギリス東印度会社の商船 <i>Cloave</i> 号が初めて平戸に入港, 船長 John Saris,
1613(慶長18)		

国王 James I の書翰を呈し通商を請う  
——平戸商館。

。平戸英国商館閉鎖。よって今後 230 有余年文物の輸入オランダを通してのみ。

。1616より欧船の来航を制限し、次々イスパニア人、ポルトガル人の来航を禁じていたが、この年オランダ人を平戸から長崎の出島に移して鎖国を完成した。

。João Rodoriguez 編『日本小文典』(*Arte breve da Lingoa Japão*) マカオ刊。

。イスパニア宣教師 Jaeinto Esquivel『日西辞書』マニラ刊。  
1603の『日葡辞書』をスペイン語に訳したもの。

。イスパニア人 Fr. Didaco Collado『日本文典』(*Ars Grammaticae Japonicae Linguae*) ローマ刊。ラテン文。文法の部 75頁、ラテン語日本語対訳辞書158頁及びその追加195頁。日本人クリスチャンの懺悔録がローマ字とラテン文訳で65頁。辞書の部と懺悔録の部は当時の口語資料となる。Rodoriguez のものを参考にしラテン文法ににっている。

。松永貞徳『和句解』 語源研究書。  
。朝鮮人康遇聖『捷解新語』10巻刊。日本語を諺文で対注対音表記したものでもかなり豊富な文例を含んでいる。  
。畠山箕山『色道大鏡』 遊里の習俗・遊里語を解説。  
。浄巖『悉曇三密抄』3巻8冊刊。『悉曇藏』(880)以来の代々の学説を集約。独創の意見は乏しい。著者は契沖の師。  
。契沖『万葉代匠記』初稿本。歴史的かなづかいの基礎ができる。  
。契沖『和字正濫鈔』5巻。2000語近い語を挙げ帰納的に処理し

1699(元禄12) 1705(宝永2)	て歴史的かなづかいを確立した。 。貝原益軒『和字解』刊。	。ロシアの都ペテルスブルクに日本語学習所設立。1702カムチャッカ漂着の伝兵衛を最初の教師とした。
1711(正徳1) 1713(正徳3)	。『混効験集』 琉球語古語辞典。	。新井白石『采覧異言』5巻。1672以来官庫所蔵の『万国輿地全図』(オランダ人Joan Blau 撰。1648アムステルダム版)を示して甲必丹や蘭医らに各国事情を尋ねてつくった世界各国の輿地誌。
1717(享保2) 1719(享保4) 1726(享保11) 1727(享保12)	。新井白石『東雅』 語源研究書。江戸初期京都語における東国語の影響を記す。 。新井白石『東音譜』 五十音を中国音と対比する。 。岡島冠山『唐訳便覧』 唐音資料。 。『志布可起』 俗語辞書。	。蘭医として1690~92滞日したドイツの博物学者 Engelbert Kämpfer の <i>Amoenitatum Exoticarum</i> (『外国奇事』), 5巻がこの年英訳され <i>History of Japan and Siam</i> (『日本志』) 2冊, ロンドンで出版。その後ドイツ語訳, オランダ語訳, フランス語訳。目録のみ日本語訳(1808)。この中に日本語の観察がある。尚彼には稿本のまま出版にならなかった和独辞書がある(大英博物館蔵)。
1734(享保19)	。盛典『倭語連声集』刊。音便現象を説く。	



1736~1739 (文元1~4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Andrej Bogdanof (カムチャッカ漂着日本人の子) 監修『日本語入門』5冊刊。文典38頁, 辞典104頁, 会話篇70頁など。ロシアにおける最初の日本語学書。又別に『露和辞典』328頁あり。</li> <li>。スペイン人 Fr. Melchor Oyanguren『日本文典』(<i>Arte de la Lengua Japana</i>) メキシコで出版。スペイン語で書かれた日本語文典。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。野呂元丈訳『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』1冊。1663和蘭甲必丹 Hendrick Indijck が幕府に献上したドイツの Johannes Jonstons 著『動物図説』をアムステルダム of 医師 M. Grasius がラテン語からオランダ語に訳したものを解釈した。(オランダ語訳図は銅版, 字は鉛活字の精巧なのに將軍が感服し, 蘭学開始の因になったという)。</li> </ul>
1738(元文3)		
1741(寛保1)		
1744(延享1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。青木昆陽『和蘭文字略考』3巻刊。</li> </ul>	
1757(宝暦5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。賀茂真淵『冠辞考』刊。</li> </ul>	
1760(宝暦10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。新井白石『同文通考』刊。文字研究。</li> <li>。本木栄三進良永 蘭英対訳の会話書を写しとる。(この時は未だ公けに英語学習は許されていない)——わが国における英語学の濫觴といわれる。</li> </ul>	
1765(明和2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。慈雲編『梵学津梁』1000巻の一部刊。古来の悉曇学の集大成——語学としての悉曇学が成立。</li> </ul>	
1768(明和5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。和蘭通詞 西善三郎致。これより先善三郎はフランス人 Pieter Marin の『蘭仏対訳辞書』(<i>Marin Woordenboek</i>) に訓釈をなし『蘭日対訳辞書』の編纂をしていたが未完で歿す。——蘭</li> </ul>	

1769(明和6)	日対訳辞書第一号。前野良沢がこれを蘭語研究の資料とした。	
1771(明和8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・賀茂真淵『語意』(1789刊)</li> <li>・本居宣長『てにをは紐鏡』刊。</li> <li>・前野良沢『蘭訳筌』1冊。オランダ語の綴字、発音、語彙、訳例の入門用学習書。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前野良沢・杉田玄白・中川淳庵『解体新書』5巻刊。</li> <li>・スウェーデンの医師兼植物学者 Karl Peter Thunberg 和蘭商館医師として来日。(在留1年4ヶ月。帰国後日本語についての著述あり。)</li> </ul>
1774(安永3)		
1775(安永4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本居宣長『字音仮字用格』刊。</li> </ul>	
1777(安永6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・谷川士清<small>ユトスガ</small>編『和訓栞』93巻, 82冊。前編(1巻~45巻)刊。中編1862, 後編1877刊。古語・雅語・口語を広く集め, 出典をあげ, 注釈を記した辞書。</li> <li>・富士谷成章『あゆみ抄』6冊刊。簡単ではあるが日本語文法の最初のもの。</li> <li>・Andry Tatarinof 編『日本語辞典』イルクーツク刊。</li> <li>・大槻玄沢『蘭学階梯』2冊稿成る。(1788刊)</li> <li>・本居宣長『詞玉緒』7冊刊。文法書。</li> <li>・前野良沢『和蘭訳筌』3冊。1771の『蘭訳筌』の増訂改編したものの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロシア船2隻 根室に來航して通商を求め——翌年拒む。</li> <li>・大黒屋幸太夫ロシア漂着。</li> </ul>
1778(安永7)		
1782(天明2)		
1783(天明3)		
1785(天明5)		
1786(天明6)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリス人 William Jones が <i>On the Hindus</i> の題でカルカッタのアジア協会で講演——古典語の中におけるサンスクリット語の意義, 共通源としての proto-type の存在, 今後における比較法の発</li> </ul>

展の可能性が示された。サンスクリット語とヨーロッパ諸語との関連性を解明しようとする比較言語学の開始。

1788(天明8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Karl Peter Thunberg『1770～1779にわたるヨーロッパ、アフリカ、アジア紀行』(<i>Resa uti Europa, Africa, Asia, förrät-tad åren 1770～1779</i>) Vols III 刊。第3巻に <i>Japanska språkiet</i> があり、この英訳を John Herbert Clifford が Basil Hall の航海記(1818) 附録へ抜萃転載し、更に琉球語を加えた。</li> <li>。大槻玄沢『蘭学階梯』2冊刊。わが国における西洋語学書刊行の最初。</li> </ul>
1790(寛政2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。陸中国南部藩士服部武喬『御国通辞』江戸語と南部方言とを対照。</li> </ul>
1792(寛政4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Karl Peter Thunberg が『ウプサラ王室科学協会新紀要』第5巻に“Observationes in linguam Japonicam”を発表。日本語の音声と語法を略解した。</li> </ul>
1793(寛政5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。大黒屋幸太夫『北槎異聞』4巻。彼は漂着後11年間滞露して帰国。その間見聞したロシアの諸事情、知識、言語を幸太夫が口述し、篠本廉が編纂。第4巻には露日語彙800を収録。</li> </ul>
1796(寛政8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。稲村三伯『波留満和解』(『江戸ハルマ』) 13巻。François Halma: <i>Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen</i> 又は <i>Dictionnaire Flaman et François</i>, 1729 アムステルダム第2版に拠り、そのフランス語を除きオランダ語部分を日本語に適用した対訳辞書。80000余語を収録。</li> </ul>
1798(寛政10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。桂川甫斎『蛮語箋』刊。日本語とオランダ語を片かな表記で対照。</li> </ul>
1801(享和1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。石塚竜磨『古言清濁考』刊。</li> </ul>

。この時幸太夫はロシアより『魯西亜文字』(1787) など辞書、小学校教科書など持帰る。

。Napoleon のイタリア遠征。

。イギリス船 *Province* 号(艦長 William Robert Broughton) が室蘭に入港。

。大ブリテン及びアイルランド連合王国成立。

1802(享和2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。京都の蘭学者辻蘭室『魯細亜字』1冊。ロシア文字と発音を記す。ロシア語に関する邦人の最初の書。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Captain Broughton の北太平洋探險記 (ロンドン版) 刊。日本語彙集がある。</li> </ul>
1804(文化1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。志筑忠雄(中野柳圃)『和蘭詞品考』(『柳圃中野先生文法』) 成稿年代不明。オランダ語法に詞品のあることを覚えて記した。詞品—parts of speech 本邦蘭文典の濫觴。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。ロシアの使節 N.P.Rezanov の乗船が漂流民をとどけて長崎に入港。アレキサンデル I の親書(露文、和文、満文)を呈す。</li> </ul>
1805(文化2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。上原熊次郎・阿部長三郎『藻汐草』(『蝦夷方言藻汐草』) 刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。高橋作左衛門景保がロシアから幕府宛の満文の国書の訓訳を命ぜられ文典『清文鑑』(1708 中国刊)を幕府より貸与された。</li> </ul>
1806(文化3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Julius Klaproth『和独辞書』(写本) 早引節用集から抜萃してローマ字の発音をつけドイツ語で解釈したもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。幕府, 長崎の和蘭通詞6人に甲必丹道富(Hendrik Doeff)についてフランス語を学ばせる——わが国フランス語学習の初め。</li> </ul>
1808(文化5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。馬場佐十郎『蘭語冠履辞考』2巻。分離動詞について説く。1855, 木版で刊。</li> <li>。本居春庭『詞八衢』刊。</li> <li>。本木正栄・楢林高美・吉雄永保『和仏蘭対訳語林』5冊。『仏郎察辞範』1冊。どちらも Pieter Marin: <i>Nouvelle méthode pour apprendre [sic] les principes et l'usage des langues françoise et hollandaise</i>, 1775, 1790 アムステルダム版の前半と後半の訳。邦人訳述のフランス語学習書の最初のもの。1790 版は J.J.Gilbert 訂。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。イギリス船 <i>Phaeton</i> 号がオランダ国旗をつけて長崎港に侵入——英学発達の端緒となったといわれる。</li> <li>。幕府, 長崎の通詞6人に和蘭商館へトルの Jan Cock Blomhoff についてイギリス語を学ばせる——わが国英語学習の初め。</li> <li>。つづいて長崎和蘭通詞全部に英魯両国語を兼修すべきことを命ず——わが国ロシア語学習の初め。</li> </ul>
1809(文化6)		
1810(文化7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。藤林泰助『訳鍵』『江戸ヘルマ』の8万語中3万余語をえらび訂正を加えて編した。蘭日対訳辞書として二番め, 附録に</li> </ul>	

『蘭学逡』がある——三伯の『波留満和解』編纂の始末とオランダ語の字体、音韻表、数字等を記す。オランダ文字・日本文字とも木版。100部刊行。

。奥平昌高『蘭語訳撰』（『中津辞書』と俗にいう）5冊、蘭日対訳辞書の第三書。7072語。

。本木正栄『語厄利亜国語和解』（一名『語厄利亜興学小筈』）10巻。写本。本邦における最初の英学書。英会話習熟を目的とし（国防のため）英語の単語と会話にかたかなで発音をするし日本語訳をつけたもの。

。吉雄梶之助『英和对訳字書』（『語厄利亜言語和解』3巻。写本。幕府、和蘭商館長甲必丹 Hendrik Doeff（道富）に命じて蘭日対訳辞書を作らせる。『長崎ハルマ』（『道富ハルマ』）という。1796の『波留満和解』と同じ原書に拠った。1815脱稿。

。吉雄俊蔵（又の名、羽栗洋斉）撰『六格前編』上中下3巻。長崎。この書の後編伝らず。中野柳圃の教に基き、case を説いた蘭文法書。

。本木正栄・檣林高美・吉雄永保・馬場貞歴・末永祥守訳『語厄利亜語林大成』4冊又は15冊。長崎。J. C. Blomhoff を師とした。幕府の命によるわが国最初の英和辞書。約5900語収録。馬場佐十郎校訂（中野柳圃遺著）『訂正蘭語九品集』3巻。『柳圃中野先生文法』（1804頃）を一層豊かな整ったものとした。多分アムステルダム居住のイギリス人 William Sewel の英蘭辞書に拠ったと思われる。

。馬場佐十郎『魯語文法規範』（*Kratkaja grammatika rossijskogo jazyka*）6冊。V. M. Golovnin と上原熊次郎の協力による。

1811(文化8)

1814(文化11)

。蚕書和解御用を天文方に設ける——のちの開成所・東京大学の濫觴。  
。ロシアの軍艦 *Diana* 号国後島に入る——艦長 V. M. Golovnin を捕う。

。Rasmus K. Rask が音韻対応の原理を発見。

<p>1815(文化12)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>馬場佐十郎『俄羅斯語小成』(『魯語小成』)11冊。魯和对訳辞書の第一号。</li> <li>藤林普山『和蘭語法解』3巻刊。Spraakkunstの原書に拠った。オランダ語文法・語法の刊本として最初のもの。</li> <li>太田方『漢呉音図』刊。</li> <li>鈴木眼『雅語音声考』刊。</li> <li>幕府官撰和蘭対訳辞書『道富ハルマ』(『長崎ハルマ』) H. Doeffと吉雄梶之助ら11人の協同でつくった。『江戸ハルマ』に比し単語だけでなく例文・句を多くとり入れ訳語・訳文ともに平易である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>杉田玄白『蘭学事始』刊。</li> </ul>
<p>1816(文化13)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大槻玄幹『蘭学凡』上中下3冊。和蘭文法書。1812の『和蘭語法解』, 1814の『六格前編』と大同小異。</li> <li>高橋作左衛門『満文輯韻』18冊。満洲語の辞典。満洲語に関する本邦最初のもの。</li> <li>高橋作左衛門『満文散語解』2冊。満洲語の文法。</li> <li>本木正英・他2名『弘即察辞範』フランス語の文法, 発音解説と単語集。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英艦那覇に来航し, 通商要求, 附近測量す。40余日滞留。その間琉球人真栄平房昭 英人について英語を学ぶ。</li> <li>Franz Bopp: <i>Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache</i>の中でこれらの諸言語の活用体系の類似点が偶然に起因するものではないこと。親族関係に起因すると考えざるをえない, と印欧諸言語の親族関係を確立した——60年後 Brugmannによって証明された。</li> </ul>
<p>1817(文化14) 1818(文政1)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春登『万葉用字格』</li> <li>本木正英・楢林高美・吉雄永保編『和仏蘭対訳語林』文法解説, 単語集でフランス語にオランダ語と日本語をつけたもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Rasmus K. Rask: <i>An Investigation on the Origin of the Old Norse or Icelandic Language</i> ゲルマン語の単語の音と他の印欧語の対応する単語の音の間に一貫した関係のあることを示した。しかしその比較研究にはまだサンスクリット語が入っていない, インドヨーロッパ語という概念はなかった。</li> </ul>

1819(文政2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Basil Hall: <i>Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island</i> 卷末に H. J. Clifford による琉球語彙と文等が附録としてつけられている。</li> <li>。Jakob Grimm: <i>Deutsche Grammatik</i> (Deutsche はゲルマン語全体をさす) ゲルマン諸語の文法的特徴を比較, 概観している。1822の第2版でゲルマン語の子音と他の印欧諸語の対応する子音との関係を体系的にとらえた。</li> </ul>
1820(文政3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。高橋作左衛門『増訂満文輯韻』11冊。考訂完成。満洲語の辞典。</li> </ul>
1821(文政4)	
1822(文政5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。岡田真澄『仮字考』</li> <li>。斎藤彦麿『音声論』 江戸言葉のアクセントの記事がある。</li> </ul>
1823(文政6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Heinrich Julius Klaproth: <i>Asia Polyglotta</i>, パリ版。本文と図表との2冊から成る。日本語をいわゆるウラル・アルタイ語族に関係づけようとした最初のもの。アジアの各言語の比較論が詳しい。1829再版。(1805~6頃日本の漂着民からイルクーソクで学んだ日本語を資料とした)</li> </ul>
1824(文政7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。足立左内訳『魯西亜学筌』1巻。ロシア語の辞書。</li> </ul>

。伊能忠敬『大日本沿海実測地図』(大図214枚, 中図8枚, 小図3枚) 及び同実測録(14冊) 完成。

。Jakob Grimm: *Deutsche Grammatik* 第2版(1819初版) でグリムの法則——印欧諸言語の子音の対応通則——の大綱を明らかにした。しかし母音に関しては誤謬のある見解を表明。

1825(文政8)		。文政の攘夷令——日本近海に来る外国船はその理由を問わず払うべきことを沿海の諸大名に命ず。
1826(文政9)	。大槻玄幹『西音発微』附録『西洋字原考』2冊刊。オランダ語の発音に和漢の音を対照して説いたもの。1816の『蘭学凡』と同種。 。ドイツ人 Philipp Franz von Siebold: <i>Epitome Linguae Japonicae</i> (『日本語要略』), バタビアで出版。ラテン語で書いた簡単な日本文典。 。石川雅望『雅言集覧』刊。(「い」から「か」まで)	
1828(文政11)		。B. H. Hodgson がサンスクリットの原稿 381 copies の存在を <i>Asiatic Researches</i> Vol. 4 の “Notes on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet” で報告。 。シーボルト事件。
1829(文政12)	。この頃 Maatschappij (マートシカッペイ) の <i>Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst</i> , 語法・文法両編輸入。和蘭文典前編・後編としてオランダ語学習の教科書とする。1842の項参照。	
1830(天保1)	。撰者不詳『語厄利詁語・忽覧朗土語集成』1冊。日蘭英三国語の会話書。 。Walter Henry Medhurst: <i>An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary</i> (『英和和英対訳辞書』), バタビア刊。石版印刷。1857~63にわが国で翻刻出版された——『英語箋前編』『英語箋後編』	
1832(天保3)		。林子平『三国通覧図説』の仏訳 <i>Trois</i>



1833(天保4)	<p>シゲノブ 。鶴峰成申『語学新書』（『西洋仮名必読』）上下2冊刊。日本文法書。術語の多くは1812の藤林泰助『和蘭語法解』などに拠った。オランダ語の mood と tense の概念を日本語に適用。（この方法は19C後半の日本語文法に引継がれた）</p> <p>。Hendrik Doeff 編『ハルマ辞書』（『道訳波留麻辞書』）1811起稿してから20余年たって出来た。11万語をこえ、3部だけ浄書。</p> <p>。橘守部『助辞本義一覧』</p> <p>。鹿持雅澄『雅語成法』</p> <p>。Johann Joseph Hoffmann: <i>Thesaurus linguae Japonicae</i> 刊。横島昭武『和漢音釈書言字考』の翻訳。</p>	<p>Royaumes, パリ刊。ドイツ人 H. J. Klaproth の訳。日本語彙集を含む。</p>
1835(天保6)		<p>。Theodor Benfey が祖語の形式を再構することの必要を指摘。</p> <p>。ドイツ人宣教師 Karl Gützlaff がハノイで聖書の『約翰福音之傳』と『約翰上中下書』を和訳、シンガポールで刊。</p>
1837(天保8)		
1840(天保11)	<p>。渋川敬直訳述、藤井質訂補『英文鑑』（上編16巻、下編6巻、附録上下）の上編16巻成る。イギリス人 Lindley Murray: <i>Grammar of the English Language</i>, 1795の26版をオランダ人 F. M. Cowan が1822蘭訳したもの（<i>Engelsche Spraak-kunst</i>）の再版に拠った。</p> <p>。熊坂健（蘭斉）『和蘭文典前編』1冊。原本は Maatschappij の <i>Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst</i>, 1822 ライデン刊の第2版。始めての蘭文典。</p>	
1841(天保12)	<p>。上記『英文鑑』下編を蘭訳第3版に準拠して刊。前年の上編の</p>	<p>。土佐の中浜万次郎（13才）米捕鯨船に救</p>

1842(天保13)	誤りも藤井質訂補す。 。箕作阮甫校『和蘭文典前篇』1冊。原本は前々年の熊坂蘭齊のものと同じ。原典は <i>Grammatica</i> (語典) と <i>Syntaxis</i> (文典) の二編から成り、その語典を校刊した。後篇は1848刊。	。幕府、異国船打払令を緩和。薪水給与令 (1806) を復活。
1846(弘化3)		。米船一隻琉球に来航。船中のイギリス宣教師(ハンガリー生れ、イギリスに帰化) Bernard Jean Bettelheim 那覇に上陸、布教と医療に従事。聖書の琉球語訳を行い安政年間に香港で刊行。
1848(嘉永1)	。箕作阮甫校『和蘭文典後篇』1冊。1842前篇のものの後篇 <i>Syntaxis</i> の翻刻。 。藤井質『英文範』を作って英読法を示そうと弘化年間に著わしていたが、この年急死。 。箕作阮甫『改正補蛮語箋』2巻。1798『蛮語箋』の増訂版。	。フランス船、米国船、デンマーク船が次々と来航して交易を求める。 。米捕鯨船乗組員 Ranald MacDonald がボートで利尻島に上陸し長崎に護送される。奉行の命により通詞14名に英語を教える。1848~49(7ヶ月)滞在し、『日英語彙』を著わす。
1849(嘉永2)	。佐久間象山校編『増訂荷蘭語彙』。P. Marin の書その他を参考にして道富訳『ハルマ辞書』(1833)を訂正増補したもの。 。石川雅望『雅言集覧』刊。(「よ」から「な」まで) 。萩原弘道『てにをは係辞弁』刊。 。草鹿砥宣隆『古言別音鈔』	。オランダ船活版印刷機を舶載——本木昌造ら鉛製蘭字活字版印刷機を購入。
1850(嘉永3)	。幕府の命により長崎通詞西吉兵衛成量ら『エゲレス語辞書和解』7冊(未完稿)(副題は <i>Engelsch en Japanisch Woordenboek</i> )	。米宣教師 Samuel Wells Williams がマカオで聖書の『馬太伝』と『創世記』

	<p>の編纂に従事。John Holtrop『英蘭辞書』(<i>Engelsch en Nederduitsch Woordenboek</i>)のオランダ語を日本語に訳したもの。発音、訳語、書き方が従来のオランダ流から脱し米国流に近づいた。</p> <p>。The <i>Elementary Catechisms</i>, ロンドン刊。64頁。英文法書。</p> <p>。本木昌造『蘭和通弁』 蘭和対訳辞書で、1848 購入の機械で流込活字法を自ら工夫して始めて印刷したもの。</p>	<p>を日本語に訳す。</p> <p>。幕府、西洋書の翻訳・刊行をみだりにしないよう制限する令を出す。</p>
1851(嘉永4)		<p>。中浜万次郎帰国の際、<i>The Elementary Catechisms</i> (1850刊) その他英学書など持ちかえる。</p>
1853(嘉永6)		<p>。Mathew C. Perry 提督, 米国使節として4 隻の軍艦をひきいて浦賀に来航, 通商を求めると英, 蘭, 漢三国語の国書を呈す。</p>
1854(安政1)	<p>。上原某(熊次郎?)『蝦夷語箋』附「魯西亜言語」</p> <p>。村上英俊『三語便覧』3 卷。始めに日本語を出しそれに相当するフランス語, 英語, オランダ語を順次掲出, 何れもローマ字綴, かたかなで発音を附した対訳辞書。原語の横に記された発音は仏, 英ともオランダ流。約3500語収載。</p> <p>。蘭人 Kramurs『和蘭辞書』(<i>Woordenboek</i>) 1 卷。木版印刷の翻刻書。</p> <p>。『蘭英対訳語学書』1 冊——<i>Van der Pijl: Gemeenzame Leerwijs, voor degenen, die de Engelsche Taal beginnen te leeren</i>, 1822ドルトリヒト刊第2版の復刻版。長崎刊。その後江戸で1859復刻出版。英語学習者用の文典と会話をかねたもの。</p>	<p>。ロシア国使 Euphimius Putiatin 軍艦4 隻をひきいて長崎に来航, 修交を乞う——魯, 蘭, 漢三国語の国書を呈す。</p> <p>。3 月アメリカ, 5 月イギリス, 12 月ロシアと修好条約締結。</p>

1855(安政2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・桂川甫周校訂『和蘭字彙』(『道富ハルマ辞書』)13冊のうち前部成る。後部は1858完成。</li> <li>・官命による長崎通詞らの『繙訳満語纂編』10冊,『繙訳清文鑑』5冊刊。</li> <li>・大庭雪斎・片田哲造校『訳和蘭文語』前後両編5冊。実作阮甫校刻の『和蘭文典』を和訳したもの。翌3年刊。</li> <li>・榊令輔『魯西亜字彙』1折。ロシア語の綴字を示し、国字でその音を附し、上段に国語、中段にロシア語、下段にオランダ語を挙げている。</li> <li>・村上英俊『洋学捷徑 仏英訓弁』1巻。W. E. Medhurst『英和英対訳辞書』(1830)を参考にした。</li> <li>・遠田著明訳『和蘭文典前編訳語彙』2巻。和蘭文典の原本を和訳したもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10月フランス,12月オランダと修好条約締結。</li> <li>・蕃書和解御用が洋学所と改称。</li> <li>・英国宣教師 Bernard Jean Bettelheim 聖書中の『路可伝』『約翰伝』『使徒行伝』『保羅奇羅馬人書』を琉球語に翻訳し、香港で出版。</li> </ul>
1856(安政3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村上英俊『五方通語』3巻。日本語からフランス語,英語,オランダ語,ラテン語を引きだす。イロハ順に配列編纂した一種の辞書。約1400語を収録。</li> <li>・長崎摺立所版『和蘭文典』文章編1冊。<i>Syntaxis of Woordvoeging der Nederduitsche Taal</i>, 1846 ライデン版の翻刻。</li> <li>・長崎摺立所版『ウエイレランド和蘭文範』1冊。<i>Nederduitsche Spraakkunst ten Dienste der Scholen, uitgeven door P. Weiland</i>, 1820 ドルトリヒト版の翻刻。</li> <li>・I. Goshkevich 編, 橘耕斉補助『和魯対訳辞書』(『和魯通言比考』)1巻。魯都セントペテルスブルク刊。全篇486頁。</li> <li>・Rodoriguez の『日本文典』(1608)や『日葡辞書』(1603)その他のものに拠った。日本語からロシア語をひく辞書。石版。</li> <li>・広田憲寛改訂増補『訳鍵』5巻。大野藩刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洋学所 蕃書調所と改称し、外国文書を取扱う外、洋学の教場となす。</li> </ul>
1857(安政4)		

- 。越前大野藩洋学館蔵版『英吉利文典』1冊。木版半紙本。26葉。原本は Van der Pijl のもの (1854の項参照) の翻刻。
- 。美作宇田川塾蔵版『英吉利文典』上巻1冊。Vergani: *Engelsche Spraakkunst vereenvoudigd*, 1853 アムステルダム第2版の翻刻。下巻は未刊。
- 。井上修理校正, 村上英俊関『英語箋』(『米語箋』) 前編3冊。W. H. Medhurst: *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*, 1830 バタビア刊の英和の部5400語を翻刻したもの。後編は1863刊。
- 。和蘭商館長 J. H. Donker Curtius: *Proeve eener Japansche Spraakkunst* (『日本語文典』), 1冊。ライデン刊。最初の部分の日本語の発音についての記述は J. J. Hoffmann の執筆。(Hoffmann はドイツ人であるがオランダで日本研究をし, 植民省の日本語通訳官であった。) 当時数多く出版された西洋人の日本語学書の中で特に秀れたもの。Hoffmann がかなり加筆。1867の Hoffmann の『日本文典』の先駆となる。1861仏訳。オランダ文日本文典の最初のもの。
- 。Léon de Rosny: *Introduction à l'étude de la Langue Japonaise* (『日本語研究序説』), パリ刊。94頁。フランス人最初の日本文典。幼稚な文典ではあるが日本語の起源論があり, 東洋諸語との比較研究という立場で論じている。1865再版。
- 。Léon de Rosny: *Dictionnaire Japonais-Français-Anglais*, パリ刊。フランス系統の純粹の辞書として最初のもの。
- 。Anton Boller: *Nachweis dass das Japanische zum Ural-Altaischen Stamme gehört* (『日本語のウラルタイ語族所屬の証明』), ウィーン刊。

1858(安政5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>掛川甫周校訂『和蘭字彙』(『道富ハルマ辞書』)13冊。後半の増補訂正も完了, 112,560語を収載することとなった。</li> <li>物集高見『辞格考抄本』刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>B. J. Bettelheim (1846の項参照) による漢訳の日本語訳対照『路加伝福音書』香港刊。</li> </ul>
1859(安政6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>村上英俊『仏蘭西詞林』(『仏蘭西字典及仏蘭西詞林』)1冊。増補完成す。約5,000葉。</li> <li>手塚律蔵・西周助校閲, 津田三五郎・牧助右衛門校正『伊吉利文典』1冊。美濃木版筆記体。原著者不詳の <i>The Elementary Catechisms</i>, 1850ロンドン版の翻刻。英文による英文典として最初。万次郎が帰国の折持帰ったものに拠っている。</li> <li>Phillipp Franz von Siebold 再来日の折言語学関係の本106冊持参。J. C. Adelung: <i>Mithridates oder allgemeine Sprachkunde</i>; F. Bopp: <i>Vergleichende Grammatik</i>; H. J. Klaproth: <i>Asia Polyglotta</i>; A. Boller; <i>Nachweis dass das Japanische zum Ural-Altaischen Stamm gehört</i> など。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Charles Darwin: <i>On the Origin of Species</i>。</li> <li>幕府, 神奈川(横浜), 長崎, 箱館(函館)の三港を開き, 米, 英, 魯, 仏, 蘭の五ヶ国に交易許可——五国条約書。</li> <li>この年ドイツ医師 Philipp Franz von Siebold 再来航し, 米医師兼宣教師 James C. Hepburn, オランダ生れ米国宣教師 Guido Fridolin Verbeck らが来日。</li> </ul>
1860(万延1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>福沢諭吉訓点『増訂華英通信』2巻。シナ語と英語の単語と会話より成る。その発音と意義をかたかなで和訳。遣米使節として渡米した折求めた清人子卿著『華英通信』に訓点をつけて翻刻したもの。</li> <li>生川正香『日本文典訳語引証 和蘭活詞考』1巻。和蘭甲必丹 D. Crutius のオランダ文『日本文典』の誤りを正し日本語法を示すために書かれた。</li> <li>松園梅彦『五国語箋』2巻。オランダ語, 英語, ロシア語, フランス語, 日本語の単語をイロハ順に配列し, かたかなで発音を示したもの。</li> <li>白井寛蔭『音韻仮字用格』刊。</li> <li>Rutherford Alcock: <i>Elements of Japanese Grammar for</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>桜田門外の変。</li> <li>蕃書取調所で英, 仏, 独, 魯の諸国学科をおく。(従来蘭語が正科であったのを英語を正科とした。)</li> <li>日米修好通商条約批准書交換のため遣米使節を送る——世界一周して始めて英語の勢力を認識。オランダ語を仲介として西洋知識を吸収するのは時代おくれとさとする。</li> <li>この年の洋書注文数1ヶ月間363種, 7,648冊。</li> <li>August Schleicherが樹系説をとなえる。</li> </ul>
1861(文久1)		

1862(文久2)	<p><i>the Use of Beginners</i> (『初学用日本文典要約』, 上海版。初學者用の実用文典。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。Léon Pagès: <i>Essai de Grammaire Japonaise</i>, パリ刊。</li> <li>Donker Curtius『日本文典』をRodoriguezとColladoの日本文典を以て増訂して仏訳したもの。</li> <li>。江戸老皂館蔵版『英吉利文範』2編刊。Lindley Murrayの英文典のPt. II <i>Etymology</i>の翻刻。1865の項参照。</li> <li>。『官版独逸語単語篇』刊。最初のドイツ語学習書。</li> <li>。堀達之助ら『英和对訳袖珍辞書』1冊。鳥の子, 洋装両面摺。開成所辞書として知られている。語数凡そ18,000。998頁。底本はH. Picard: <i>A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages</i>, 1857版。背皮製ポケット本で訳本の「袖珍」はPocketの訳であるが, 実際の訳本はポケット版ではない。Picardの英蘭の部のオランダ語を削り, 『和蘭辞彙』や『訳鍵』その他の蘭和辞典中の和訳語を入れたもの。</li> <li>。黒川春村『音韻考証』</li> <li>。『和訓栞』中編(46巻~75巻)刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。Philipp Franz von Siebold 江戸に来る——幕府の国際関係問題の adviser として。</li> </ul>
1863(文久3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。開成所刊『英吉利文典』1冊。 <i>The Elementary Catechisms</i>, 1850ロンドン刊の翻刻。小さな紙型から俗に『木の葉文典』とよばれ, 英学生に愛用された。引続き2版, 3版, 4版が出る。</li> <li>。村上英俊『英語箋』後編4冊。(前編は1857) Medhurst『英和英辞書』の和英の部を校訂翻刻したもの。</li> <li>。米人 S. R. Brown; <i>Colloquial Japanese</i> (『英和对訳俗語典』) 2冊。上海刊。アルファベット順で頭の英文字を引出して英会話を和訳したもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。August Schleicher; <i>Compendium der vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprache</i> で印欧祖語の音韻体系や個々の単語・語尾などを再構築した。</li> <li>。蕃書調所が洋書調所と改称する。なおドイツ語の学習を開始。</li> <li>。幕府が第1回オランダ留学生を送る。</li> <li>。洋書調所が開成所となる。</li> <li>。Hermann Grassmann が印欧語の閉鎖音の対応におけるある種の例外の生ずる原因を明らかにした。</li> </ul>
1864(元治1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。村上英俊『仏語明要』4巻。コンサイス仏和辞典。1859版『仏</li> </ul>	

1865(慶応1)	<p>蘭西詞林』を増補訂正したもの。740頁。約35000語。</p> <p>。『英文典蘭訳本』1巻。原本は Lindley Murray: <i>Engelsche Spraakkunst</i>。</p> <p>。『英吉利文範』初編1冊。Lindley Murray の英文典の Prt. III <i>Syntax</i> の翻刻。</p>	<p>。横浜仏蘭西語学習所(Collège Japonais-Français) 開設。</p>
1866(慶応2)	<p>。『改正増補 英和対訳袖珍辞書』1冊。開成所発行。998頁。</p> <p>1862 版を堀越亀之助が主として増訂したもの。1,000部。翌年第3版刊(蔵田屋)。</p> <p>。柳川春三『法朗西文典』前篇1冊。フランス人 M. Naël・M. Chapsal 共著のフランス文典 <i>Grammaire Française</i>, 1861 パリ版の抜萃要約の復刻。</p>	<p>。4 月幕府海外留学を許可。</p> <p>。12月幕府開成所より14人を選抜しイギリスに留学させる。</p>
1867(慶応3)	<p>。I'Abbé Mermet de Cachon: <i>Dictionnaire Français-Anglais-Japonais</i> (『仏英和辞書』), 上巻, パリ刊。下巻未刊。</p> <p>。James Curtis Hepburn: <i>A Japanese and English Dictionary; With an English and Japanese Index</i> (『和英語林大成』, 俗に『平文辞書』) 1巻。上海版。700頁, 20700 語 収載。W. H. Medhurst『英和和英対訳辞書』1830バタビア版と『日葡辞書』1603を参考に岸田吟香の助力をえて, 編纂した対訳辞書。日本語をローマ字で綴り, それに漢字又はかたかなで読みかたを示し, 英語で説明。1872に第2版。1886に第3版。第3版以降が今日のヘボン式ローマ字で綴っている。</p> <p>。柳川春三『洋学指針』英学部1冊。</p> <p>。柳川春三・小林鼎輔『法朗西文典』後篇1冊。前年の『法朗西文典』前篇の続篇。</p> <p>。ドイツ人 Johann Joseph Hoffmann: <i>Japansche Spruakleer</i> (蘭), <i>A Japanese Grammar</i> (英) (『日本語文典』), ライデ</p>	<p>。F. Max Müller『梵語文典』刊。</p> <p>。箱館領事 I. Goshkenvich の進言でロシアに留学生6人を送る。</p> <p>。T. Benfey『梵英辞典』</p> <p>。大政奉還。王政復古。</p>



1868(明治1)	<p>ン刊。初版は蘭英両語で同時に出版。ヨーロッパでは当時は勿論後日まで日本文典の権威と目せられ、のちの Aston, Chamberlain の辞書の先駆をなす。着眼がすぐれ、既にP音考（未熟ではあるが）や動詞の語根（root）について又受身形についてなど創見を出し、内外の学界に大きな貢献と影響を与えた。</p> <p>1876ドイツ語訳, <i>Japanische Sprachlehre</i>, ライデン刊。</p> <p>。小幡篤次郎・小幡甚三郎『英文熟語集』1巻。熟語専門の英和辞書として最初のもの。</p> <p>。桂川甫策（国幹）『英仏単語便覧』2冊。</p>	<p>。明治維新。</p> <p>。五箇条の誓文。</p> <p>。開成所一時閉鎖。</p>
1869(明治2)	<p>。Léon Pagès: <i>Dictionnaire Japonais-Français</i>, パリ刊。『日葡辞書』の仏訳。</p> <p>。William George Aston: <i>A Short Grammar of the Japanese Spoken Language</i> (『日本口語小文典』), 長崎刊。40頁。1873仏訳さる。</p> <p>。日本薩摩学生編『和訳英辞書』（俗に『薩摩辞書』）1冊。上海刊。洋紙, 洋装, 背皮, 700頁。30,000語を超える見出し語にかたかなで発音標記 (Guido F. Verbeck の指導でオランダ語訛も混在)。1862版の『英和对訳袖珍辞書』を底本とした。1500部。1871増訂し, 第2版から『和訳英辞林』と改題。</p> <p>。慶応義塾蔵版『ピネヲ氏原板英文典』1冊。T. S. Pinneo: <i>English Grammar</i> の翻刻。</p>	<p>。W. Yates『ベンガリ文典』カルカッタ刊。</p> <p>。東京奨都。</p> <p>。開成所大学南校として再開。大学は大学本校（昌平学校—漢皇学）, 大学南校（洋学）, 大学東校（医学）の三部より成る。</p> <p>。杉田玄白『蘭学事始』2巻刊。</p>
1870(明治3)	<p>。永島貞次郎訳『ピネヲ氏原板英文典直訳』2巻。返り読み式の訳をほどこした。</p> <p>。大学南校助教訳『格賢勃斯 (P. C. Quackenbos) 英文典直訳』2冊。大学南校版。読み下し式の訳。1886再版。欧文書館蔵版。</p>	<p>。橘耕斎 (1857密航) ウラディミール・ヤマトフと称してペテルスブルグ大学で日本語を教授 (1870~74) ——大学で教えられた最初の日本人。</p> <p>。普仏戦争 (1870~71) ——フランス降伏。</p>

<p>1871(明治4)</p>	<p>。『英吉利文典』1巻。福田氏蔵版。問答体で記され Pt. I Introduction に始まり Appendix で終る。</p> <p>。青木輔清『英文典便覧』1巻。武蔵の忍藩洋学校版。復刻や訳でなく日本人がまとめた最初の英文典。しかし用語例文はピ子ヲのものに拠る。</p> <p>。前田正毅ら『大正増補 和訳英辞林』1巻。860頁。上海刊。『薩摩辞書』の再版。しかしウェブスター式発音記号。</p> <p>。岡田好樹『官許 仏和辞典』1巻。436頁。M. Nugent: <i>Dictionnaire de Poche des Langue Francaise et Anglaise</i>, ロンドン13版の訳。本邦における比較的完備した最初の仏和対訳辞典。</p> <p>。吉田庸徳『袖珍英和節用』</p> <p>。柴田清熙編述『洋学指針』刊。</p>	<p>。廃藩置県。</p> <p>。Monier Monier-Williams『梵英辞典』刊。</p>
<p>1872(明治5)</p>	<p>。William George Aston: <i>A Grammar of the Japanese Written Language</i> (『日本文語文典』), 横浜刊。1877増補第2版。1964第3版ロンドン刊。</p> <p>。荒井郁編『英和对訳辞書』1巻。開拓使(北海道)蔵版。俗に『開拓使辞書』という。</p> <p>。吉田賢輔編『英和辞典』1巻。イギリス人 P. A. Nuttall の辞書 Webster の大辞典及び英漢対訳の字典などに拠った。</p> <p>。米人平文編『和英語林集成』増補訂正第2版。和英之部に新語3,000語を加え、632頁、英和之部に4,000語増補し201頁、計833頁とし、ローマ字綴法も改訂。この改訂には S. R. Brown, W. G. Aston, 奥野昌綱らが協力した。</p> <p>。青木輔清『語学便覧』(『英吉利語学便覧』)初編1巻。英語の発音、綴法の規則を示す。</p> <p>。石橋正方撰、島桂潭増補『改正増補 英語箋』2冊。</p>	<p>。文部省学制頒布。</p> <p>。太陽暦採用。</p> <p>。お雇い外人 この年の調査でイギリス人119名、フランス人50名、アメリカ人16名が鉄道・灯台・造船、その他文部・電信・造幣・勸農・農作・開拓など殖産・興業方面の新しい国づくりに従事していた。</p> <p>。アメリカ人 R. G. Watson 約100名の会員をえて「日本亜細亜協会」を組織——アジアの言語、歴史、文化等を研究する団体。</p> <p>。森有礼(遣米使)ニューヨークで <i>Education in Japan</i> を出版。日本語を廃し</p>

- 。榎本寛則訳『挿訳英文典』2編2冊。T. S. Pinneo の英文典を訳したもの。
- 。村上英俊『英仏二語便覧』1冊。英仏の単語をイロハ順に配列し、それに和訳をつけたもの。
- 。戸田忠厚訳『英文法独学』1冊。Quackenbos の英文典を直訳したもの。
- 。志水洋游訳『クァッケンボス・ピネオ文典字類』2冊。Quackenbos と Pinneo の文典から必要な単語を抜萃し、A B C順に配列し訳したもの。
- 。司馬凌海『和訳独逸辞典』1巻。春風社刊。ドイツ語辞典の第一書。26000語。
- 。桜井・小田・藤井編『享和袖珍字書』(*Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch*) 1巻。東京学半社蔵版。1,373頁。独和辞典としては少々完備したもので独和对訳辞書第二書。
- 。山本松次郎篇 *Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch* (『袖珍字語訳裏』) 1巻。長崎出藍斉版。505頁。
- 。馬場辰緒: *An Elementary Grammar of the Japanese Language* (『日本文典初歩』) ロンドン刊。
- 。松田為常・瀬之口隆敬・村松経春編『独和字典』1巻。上海刊。独和の薩摩辞書といわれるもの。ドイツ人ワグネルの助力をえて独蘭、独英及びホフマン・ウエベル両氏の字書を参考として編集した。
- 。柴田昌吉・子安峻訳『附書挿図 英和字彙』1巻。日就社蔵版(横浜)。1,228頁。語数55,000余、本邦で印刷した初めての英和辞書。1882増補訂正第2版。1887更に訂正増補し第3版。John Ogilvie: *An English Dictionary, Etymological*,
- て英語にかえることを主張——イエール大教授 W. D. Whitney が反対 (“On the adoption of the English language in Japan”)。
- 。ロシア人宣教師 Ioan Nikolaj Kasatkin (1861 来日)「ニコライ塾」(のちの東京ニコライ学院)を創設。
- 。Johannes Schmidt: *Die Verwandtschaftsverhältnisse der Indogermanischen Sprachen* (『印欧諸語の親族関係』)で波動説をとなえる。
- 。キリスト教解禁。1549ザヴィエルが渡来して宣教してから324年、1638 耶蘇教厳禁より235年にして布教が自由となった。
- 。ヘボン辞書の短縮版がニューヨークで出版される。
- 。この年 Basil Hall Chamberlain 来日。
- 。 *Transaction of Asiatic Society of Japan* 『日本亜細亞協会誌』発刊。1872 設立の日本亜細亞協会の研究報告機関誌。

1873(明治6)

<p><i>Pronouncing and Explanatory</i>, 1867 ロンドン刊を原本とした。明治前期の英和辞書の中では最もすぐれている。</p> <p>。岸田吟香編『和訳英語聯珠』1冊。ウェブスター辞書より必要の語60,000余を訳出したもの。</p> <p>。松田・瀬之口・村松編『独和辞典』720頁。上海刊。</p> <p>。緒方維孝編『魯語箋』2冊。札幌開拓使発行。</p> <p>。田中義廉『小学日本文典』刊。英文典に摸してつくられた。</p> <p>。敷田年治『音韻啓蒙』刊。</p> <p>。ウイリアム・エブストル著、関吉孝訳『袖珍英和辞典』1巻。洋紙・洋装・活版刷。316頁。著者は Noah Webster の子 William G. Webster であろうといわれる。ウェブスター辞典を基とした小辞典であるが、発音符号を省き片かなで簡単な訳がついている。</p>	<p>。西周が「洋字を以て国語を書するの論」と題する論文を『明六雑誌』第4号に掲載——所謂ローマ字論。これに対し西村茂樹は「開化の度に因りて改文字を發すべきの論」を『明六雑誌』に掲載して反駁。——国字改革は文明開化の程度に従い順をおってなすべきとの説。</p>
<p>1874(明治7)</p>	<p>。V. Thomsen が「口蓋音法則」を講義で発表。</p> <p>。Karl Verner がグリムの法則でまだ残されていた例外が祖語におけるアクセントの位置の相違によって生じたものだとする説(ヴェルネルの法則)を公表。</p> <p>。Karl Brugmann が“Nasalis Sonans in der indogermanischen Grundsprache”の論文で印欧諸言語に「成節的鼻音」を</p>
<p>1875(明治8)</p>	<p>。『広益英倭字典』1巻。洋紙・洋装・背皮製。1,000頁。1862初版の『英和对訳袖珍辞書』の第3版(1867)の遺漏を補うため、イギリスの Nuttall の辞書、アメリカの Webster の辞書、Hepburn の辞書その他から要語46,000余をあつめた。</p> <p>。官命によって『言海』起革。1884(明治17)成稿。</p> <p>。W. イエーツ著、黒田行元訳『ベンガリ文典』12冊。1868の訳。</p> <p>。中根淑『日本文典』及び『日本小字典』刊。</p> <p>。中村敬字校正、津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳『英華和訳字典』乾坤2冊。W. Lobscheid: <i>English and Chinese Dictionary</i> の抜萃和訳。</p> <p>。Ernest Mason Satow &amp; Ishibashi Masakata: <i>An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language</i>. ロンドン刊。</p> <p>。B. H. Chamberlain: “Jitsu-go-Kiyo (The Teaching of the</p>
<p>1876(明治9)</p>	

1877(明治10)

- 斎田・那波・国司共撰, Hermann Ritter 校『和独対訳字林』1巻。Hepburn の和英辞典をモデルにした最初の和独辞典。
- M. モニア・ウィリアムズ著, 栗原重冬訳『サンスクリット小文典』堀秀成『日本語学階梯』及び『日本語格全図』刊。
- 里見義『雅俗文法』刊。G. L. Cockran の序があり, 英文典の影響がみえる。
- 『和訓栞』後編(76巻—93巻)刊。前編(1777), 中編(1862)既に刊。
- B. H. Chamberlain: "On the use of 'pillow-words' and plays upon words in Japanese poetry," を *Transaction of Asiatic Society of Japan* Vol. 5, Pt. 1 に発表。

1878(明治11)

- 物集高見『初学日本文典』刊。
- B. H. Chamberlain: "On the mediaeval colloquial dialect on the comedies," *TASJ* Vol. 6.

1879(明治12)

- 佐藤誠実『語学指南』刊。
- W. G. Aston: "A comparative study of the Japanese and Korean languages," (『日鮮両語比較研究』) *Journal of Royal Asiatic Society for Great Britain and Ireland* Vol. 11, No. 3

再構し, さらに H. Osthoff の説をとり入れて「成節的 r, l」を再構。——印欧諸言語における母音対応上の例外の多くのものの生ずる原因がこれで説明されることになる。その結果 ablaut に関する考え方が根本的に変化する。

- 西南の役。
- 東京大学開校。法・経・文三科をおき, 加藤弘之総長となる。
- Georg von der Gabelentz: "Über eine Eigenthümlichkeit des Japanische Zahlwortes" で日本語の数詞が倍数をあらわすのに母音の変化を以て表わすことを海外で始めて唱える。

- Brugmann と Osthoff が *Morphologische Untersuchungen* と題する雑誌を発刊。第1巻の序に「若手文法学派の方向」を標榜し, 音韻法則の例外性皆無を強調。
- 南条文雄(1884まで)と笠原研寿(1882まで)この年より Oxford に留学, Max Müller のもとでサンスクリット語及び比較言語学を研鑽, 共同研究を行う。
- 新約聖書の日本語訳業成る,

1880(明治13)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ B. H. Chamberlain 『英語変格一覧』(和文) 上下2巻。和紙・和装・木版刷, 上巻31葉, 下巻40葉。一貫堂刊。</li> <li>◦ 大矢透 『語格指南』刊。</li> <li>◦ アメリカ人 William Imbrie: <i>Handbook of English-Japanese Etymology</i> (『英和語学階梯』)</li> <li>◦ 『ピネヲ氏英文典』翻刻1冊。洋紙ボール表紙活版刷。158頁。</li> <li>◦ 永峰秀樹訳『華英辞典』訓訳。1冊。洋紙洋装活版刷。293頁。</li> <li>◦ W. H. Medhurst のシナ語原版に拠る。</li> <li>◦ 文部省編『語彙活語指掌』</li> <li>◦ 文部省編『語彙』(い・うの部) 刊。</li> <li>◦ B. H. Chamberlain: “Notes on the dialect spoken in Ahidzu,” <i>TASJ</i> Vol. 9, Pt. 1</li> <li>◦ 南条文雄・F. Max Müller: <i>Buddhist Texts from Japan 1</i>, 金剛經, オックスフォード刊。慈雲『梵学津梁』1765に含まれていたものの改訂。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Hermann Paul: <i>Prinzipien der Sprachgeschichte</i>.</li> <li>◦ 新約聖書日本語訳 出版完了。</li> </ul>
1881(明治14)		
1882(明治15)		<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 矢田部良吉, ローマ字国字説を主唱(『東京学芸雑誌』)。</li> <li>◦ B. H. Chamberlain: “‘Ko-ji-ki’ or Record of Ancient Matters (『古事記』英訳),” <i>TASJ</i> Vol. 10 Supplement.</li> </ul>
1883(明治16)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 『増補稚言集覧』刊。</li> <li>◦ B. H. Chamberlain: “Notes on Japanese Philology,” <i>the Chrysanthemum</i> Vol. III, No. 3, &amp; 5 日本の古い言葉と朝鮮の言葉とを対照した箇所があり, 国語学上また比較言語学上意義があるもの。</li> <li>◦ W. Lobscheid 著, 井上哲次郎訂増『英華字典』1冊。洋紙洋装活版刷。1,357頁。</li> <li>◦ 阿保友一郎『日本文法』</li> <li>◦ 斎藤秀三郎『スウヤンソン氏英語学新式直訳』1冊。洋紙洋装</li> </ul>	
1884(明治17)		<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 南条文雄アメリカ経由帰国(3月オック</li> </ul>

1885(明治18)	<p>ボール表紙活版刷。263頁。grammar を science と定義した Swinton の <i>New Language Lessons</i> の訳。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。前田元敏纂述策訂正増補『英和对訳大辞彙』1冊。大阪同志社活版部刊。洋紙洋装活版刷。619頁。Webster 辞典の増補版に拠ったもの。ウェブスター式発音符号採用。</li> <li>。ナットル原著，棚橋一郎訳『英和隻解字典』1冊。洋紙洋装活版刷。885頁。1886再版。'87, 4版刊。</li> <li>。嶋田三郎校訂，市川義夫纂編，河原英吉校字『英和和英字彙大全』2冊。洋紙洋装背皮製活版刷。英和之部820頁，和英之部589頁。1887に『英和和英袖珍字典』として再版。</li> <li>。B. H. Chamberlain : "The so-called 'root' in Japanese verbs," <i>TASJ</i> Vol. 13, Pt. 2.</li> <li>。Léon de Rosny : <i>Examen Comparé de la grammaire Turque et de la grammaire Japonais</i> (『日本文法とトルコ文法との比較研究』)</li> </ul>	<p>スフォード大でM. A.を受く)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。神田孝平，言文一致を説く (『東京学士院会雑誌』)</li> <li>。南条文雄東京大学文学部嘱託講師(梵語)となる——梵語学開講の始め。</li> <li>。大学令公布。東京大学は官立総合大学となり，分科大学として文科大学成立。</li> </ul>
1886(明治19)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。菊地武信『英語発音秘訣』ウェブスター式発音を扱いながらも発音器官を説明し，多くの口形図をのせ，抑揚のことにもふれている。</li> <li>。高橋泰山訂正『仏和辞典』1冊。1871の仏和辞典をB 6判637頁に訂正した。</li> <li>。前田正毅・高橋良昭共編『和訳英辞林』1冊。806頁。大阪大東館刊。『薩摩辞書』(1871上海再版)を活字をかえて翻刻したもの。</li> <li>。南条文雄関『和英辞典』(<i>A Japanese English Dictionary</i>) 1冊。洋紙洋装活字版。329頁。日本語はすべてローマ字綴。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。言文一致論(美妙・四迷等)起る。</li> <li>。東京大学文科大学長外山正一に招かれて</li> <li>B. H. Chamberlain 東京大学博言学科初代教師となる(1890まで，1891名誉教師) 日本語学及び博言学を教える。</li> </ul>

- 。『改正増補 和英英和語林集成』へボン辞書増補第3版。洋紙洋装背皮製。活字版。962頁。1872(M5)版の再増補。へボン式ローマ字採用。高橋五郎の助力で丸善から出版。約10,000語が加えられ35600語となった。その後56版を重ねる。
- 。源綱紀『ブラウン氏英文直訳全』
- 。B. H. Chamberlain: "Past participle or gerund? A point of grammatical terminology," *TASJ* Vol. 14, Pt. 1.
- 。B. H. Chamberlain: *A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)*, ロンドン刊。1922アメリカ人 J. G. McIlroy によって改訂されるまでこれ以上の英語で書かれた日本語文典はなかった。
- 。Philip Noack: *Lehrbuch der Japanischen Sprache*, ライプチヒ刊。
- 。B. H. Chamberlain『日本小文典』(和文)文部省依嘱。
- 。中江・伊藤・野村編: *Dictionnaire universel Français-Japonais*.
- 。『格賢勃斯文直訳』1870版を合本再版したもの。洋紙ボール表紙木版刷。149葉。
- 。村松守義『英和隻解隠語彙集』1冊。洋紙洋装。活版刷。166頁。わが国における slang dictionary の最初のもの。
- 。清水誠吾『イングリッシュ文法主眼』
- 。B. H. Chamberlain: "Language, mythology and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies," *Memoire of the Literature College, Imperial Univ. of Japan*, No.1 (「アイヌ研究からみた日本の言語・神話及び地名」) アイヌ語は日本語とどういう関係にあるのか。



1888(明治21)	<p>附録としてアイヌに関する彼の文献目録465種の書目と John Batchelor の An Ainu Grammar がある。</p> <p>◦ Guido Fridolin Verbeck: <i>Synopsis of All the Conjugation of Japanese Verbs with Explanatory Text and Practical Applications</i>, 横浜刊。</p> <p>◦ 島田豊『和訳英字典』明治30年代まで広く用いられた。</p> <p>◦ イーストレーキ・棚橋一郎『和訳字彙』</p> <p>◦ B. H. Chamberlain・上田万年: "Vocabulary of the most ancient words of the Japanese language," <i>TASJ</i> Vol. 16.</p> <p>◦ B. H. Chamberlain: <i>A Handbook of Colloquial Japanese</i> (『日本口語文典』) ロンドン刊。485頁。1889訂正増補第2版。</p> <p>◦ ピェール・レイ・田中弘義『和仏辞書』200頁。</p>	<p>◦ 上田万年 東京帝国大学卒。</p> <p>◦ 旧約聖書日本語訳 出版完了。</p>
1889(明治22)	<p>◦ John Batchelor: <i>An Ainu-English-Japanese Dictionary</i> (『アイヌ英和対訳辞書』) 刊。1905増補再版。1926増補3版。</p> <p>◦ 平井広五郎訳述『須因頓大文典講義』</p> <p>◦ John Harington Gubbins: <i>A Dictionary of Chinese-Japanese Words in the Japanese Language</i>, 3冊。1889—1891 東京博聞本社刊。</p>	<p>◦ 帝国憲法発布。</p> <p>◦ Karl Adolt Florenz 1889から1914まで 東京帝国大学でドイツ文学及び言語学 (1890から)を講じる——音声学を紹介。</p>
1890(明治23)	<p>◦ B. H. Chamberlain: "What are the best names of the 'bases' of Japanese verbs?" <i>TASJ</i> Vol.18, Pt. 1.</p> <p>◦ 岡倉由三郎『日本語学一班』刊。</p>	<p>◦ 教育勅語発布。</p> <p>◦ 上田万年渡独——Leskien, Windisch, Wundt, Brugmann のいるライプチヒ大学へ。</p> <p>◦ 高楠順次郎 英国に留学——Max Müller に師事。</p>
1891(明治24)	◦ 大槻文彦編「言海」刊。	
1892(明治25)	◦ 山田美妙「日本大辞書」刊。	◦ 上田万年ドイツ留学満期後更に6ヶ月フ

1893(明治26)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ B. H. Chamberlain: "On the manners and customs of the Loochooans," <i>TASJ</i> Vol. 21.</li> <li>◦ 鹿持雅澄『舒言三転例』刊。</li> <li>◦ 鹿持雅澄『用言変格例』宮内省刊。</li> <li>◦ 上田万年欧洲留学から帰り、帝大の講座担当——国語学史、音声学(課外)、梵語演習。日本人による初めての言語学関係講座。</li> <li>◦ 物集高見『日本大辞林』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ ランス留学。</li> <li>◦ 3月, Chamberlain 琉球を訪れ1ヶ月程那覇に滞在, 1895論文の資料の一部を集める。</li> </ul>
1894(明治27)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 上田万年『国語のため 第一』刊。</li> <li>◦ B. H. Chamberlain: "A comparison of the Japanese and the Luchuan Languages," <i>TASJ</i> Vol. 23.</li> <li>◦ B. H. Chamberlain: "Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan Language," (<i>TASJ</i> Vol. 23, Supplement. に寄与する論文) <i>TASJ</i> Vol. 23, Supplement.</li> <li>◦ 岡倉由三郎「新国字論」(『帝国文学』)</li> <li>◦ 上田万年帝国大学担当講座——博言学, 音声学, 国語学史。</li> <li>◦ 芳賀矢一「グリムの音韻法則について」(『第一高等学校同窓会誌』61, 11月) グリムの法則がわが国に紹介された初め。</li> <li>◦ 大槻文彦『広日本文典』『同別記』刊。和洋の学を勘案した近代日本文法学のさきがけ。</li> <li>◦ 金沢庄三郎『ことばのいのち』刊。</li> <li>◦ 上田万年担当講座——博言学, 同演習, 国語学。この年言語学演習に H. Paul: <i>Prinzipien der Sprachgeschichte</i> を使う。</li> <li>◦ 高楠順次郎帝国大学で博言学講座分担。</li> <li>◦ Sergej Glebov と岩沢丙吉がロシア語文法を編纂。1916八杉貞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 高楠順次郎オックスフォード大学卒(B.Aの学位を受く)——主として博言学, 印度文学, 梵文学, 哲学, 比較言語学等を修む。</li> <li>◦ 1894~95 日清戦争。</li> <li>◦ 高楠順次郎ベルリン大学に移る。</li> </ul>
1895(明治28)		
1896(明治29)		
1897(明治30)		<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 高楠順次郎帰国。帝国大学文科大学講師(梵語)。</li> </ul>
1898(明治31)		<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 「言語学会」創立。</li> <li>◦ 「国字改良会」設立。</li> </ul>

<p>利『ロシア語階梯』が出るまでロシア語学習の権威書。          。セス, 上田万年・金沢庄三郎訳『言語学』刊。          。畔柳都太郎『邦語英文典』          。島文次郎補訳『涅氏邦文英文典』正篇刊。後篇1899, 続篇1900          刊, J. C. Nesfield が印度人学生のために著わした文典の補訳。          。三上忠造『中等国文典』上, 中, 下3冊。印度人学生のために          書かれた Nesfield の英文法書を参考に芳賀矢一の指導のもと          に編纂された。「完了」という訳語が採入れられ, 現在, 過去,          未来各々にこれをつけて6つの時制とした。          。井上十吉『英文典講義』          。大矢透『国語溯源』刊。          。保科孝一『国語学小史』刊。          。B. H. Chamberlain : <i>A Practical Introduction to the          Study of Japanese Writing</i> (『文字のしるべ』) ロンドン・横          浜刊。1905第2版, 1910ロシア語訳刊。          。保科孝一『言語学大意』刊。          。イギリスの音声学者 E. R. Edwards が来日。日本語の発音を          観察し, その正確な音声学的記述の基礎をつくる。          。前波仲尾『日本語典』刊。          。松下大三郎『日本俗語文典』刊。          。山田美妙『言文一致文例』刊。          。草野清民『日本文法』刊。          。岡倉由三郎『発音学講話』刊。——発音器官, 音韻の分類, 音          の結合, 軽重, 長短, 高低, 音色, 音韻の変化などが, 主とし          て日本語の音色を対象として講じられている。初めて英語発音          学が科学的・組織的出発点を与えられた。</p>	
<p>1899(明治32)</p>	<p>。高楠順次郎 東京帝国大学文科大学教授          となる。上田万年教授が文部省専門学務          局長となり, 同教授の博言学講座を担          当(1901まで)。          。『言語学雑誌』創刊。          。東京帝国大学の「博言学科」を「言語学          科」と改称。</p>
<p>1900(明治33)</p>	
<p>1901(明治34)</p>	

1902(明治35)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。新村出『イエス・ペルセン氏言語進歩論』刊。</li> <li>。金井保三『日本俗語文典』刊。</li> <li>。山田孝雄『日本文法論』上巻刊。</li> <li>。保科孝一『言語学講話』刊。</li> <li>。入江祝衛『日本俗語文法論』刊。</li> <li>。R. B. McKerrow・片山寛共著『英語発音学』</li> <li>。上田万年『国語のため 第二』刊。</li> <li>。保科孝一『ホイットニー言語発達論』刊。</li> <li>。鈴木暢幸『日本口語典』刊。</li> <li>。金沢庄三郎『日本文法論』刊。</li> <li>。E. R. Edwards: <i>Etude Phonétique de la Langue Japonaise</i> (『日本語の音声学的研究』) ライプツヒ刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。岩崎久弥 マクス・ミュラー文庫 (Max Müller 蔵書全部) を東京帝国大学に寄贈。</li> <li>。「国語調査委員会」創立。</li> </ul>
1903(明治36)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。芳賀矢一『明治文典』刊。</li> <li>。二橋謙『日露字典』。B 6判600頁。日本刊行最初のロシア語辞典。</li> <li>。国語調査委員会『音韻分布図』, 『音韻調査報告書』刊。</li> <li>。和田万吉『日本文典講義』</li> <li>。吉岡卿甫『日本国語法』刊。</li> <li>。国語調査委員会『口語法調査報告書』, 『口語法分布図』刊。</li> <li>。金沢庄三郎・後藤朝太郎訳『マックス・ミュラー言語学』刊。</li> <li>。岡倉由三郎『英語発音学大綱』刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。1904~05 日露戦争。</li> <li>。ボーツマス条約調印。</li> </ul>
1904(明治37)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。藤岡勝二『国語研究法』刊。</li> <li>。金沢庄三郎『辞林』刊。</li> <li>。福井久蔵『日本文法史』刊。</li> <li>。保科孝一『国語学史』刊。</li> <li>。上田万年『国語学叢話』刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。John Lawrence (1850—1916) が来日, 東京帝国大学文科大学で英語学・英文学</li> <li>・西洋古典講座 比較言語学を教える。</li> <li>。京都帝国大学開設。哲・文・史の三科をおく。</li> </ul>
1905(明治38)		
1906(明治39)		
1907(明治40)		
1908(明治41)		

1909(明治42)	<ul style="list-style-type: none"> <li>。山田孝雄『日本文法論』刊。</li> <li>。三矢重松『高等日本文法』刊。</li> <li>。大矢透『仮名遣及仮名字体沿革資料』刊。</li> <li>。丸山通一『羅馬字のすすめ』刊。</li> <li>。亀田次郎『国語学概論』刊。</li> <li>。志田義秀・佐伯常麿『日本類語大辞典』刊。</li> <li>。金沢庄三郎『日韓両語同系論』刊。両言語が同系である蓋然性の高いことを明らかにした。しかし両者間の親族関係が証明されたとはいえない。</li> <li>。保科孝一『国語学構義』刊。</li> <li>。金沢庄三郎『国語の研究』刊。</li> <li>。国語調査委員会『口語体書簡文に関する調査報告』刊。</li> <li>。スウィート著 金田一京助訳『新言語学』刊。</li> <li>。吉岡卿甫『文語口語対照語法』刊。</li> <li>。金沢庄三郎『日本文法新論』刊。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。韓国併合。</li> <li>。九州・東北両帝国大学設立。</li> </ul>
1910(明治43)		
1911(明治44)		
1912(明治45)		
参 考 文 献	国語学会編『国語学辞典』19版 東京堂 1970 大月如電原著 佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』錦正社 1965	